

資料渉猟余話

その134

水野都津生が本格的に民俗学に取り組みはじめたのは阿南高校在職のあたりから。飯田美術博物館には野帖やス

れようとしていた小さな芸能に視点を当てていることに大きな特徴を見いだせません。芸能研究の主なテーマとなった春日

水野都津生の旧宅跡にて

嶋 不濁

美博の学芸員だった櫻井弘人はそれらの資料をもとに「水野先生の芸能研究は、主な執筆一覧をみてわかるように、遠山霜月祭とか新野の雪祭といった全国的にも有名な芸能はあまり取り上げず、むしろ忘れ去ら

は取り壊される寸前(部)、『随筆山居読書人』(姫城書院・昭和22年。これは21年の奥付のもの)と22年の奥付を持つもの2種類ある。姫城書院は後の平安堂書店だが、日本の古本屋など古書店の目録には言い合わせたように



さらに2階の物置らしきところには飯田高校・下伊那農業・阿南高校・長姫商業時代のアルバムが2冊以上残されていた。すべて確認できていないが、中には、昭和27年1月の郡下高等学校の合同演芸会の写真もあり、戦後の飯伊演劇を牽引した宇治正美(阿南病院長)や高堂正男らと各高等学校の生徒と一緒に写っている。下伊那農

業に転動した昭和36年頃の演劇の写真などもあるから、教壇を去るまで水野が演劇に関わっていたことが窺い知れる。これもまた郷土の演劇史・文化史にとって貴重な資料なので、(2020・1・5)



多方面への興味もやはり水野の一面である。『伊那』誌へ投稿した多種多量の論考の裏側には水野のこうしたフィ

「姫路書院」となっているのが妙だ)、『竹枝町巷談』(的場書房版 昭和30年限定300部)など希少本が出てきた。国文学の学徒だった水野らしいコレク

ションだ。時期的にはない。『随筆山居読書人』などの何編は全集にも収録されていないが、終戦前後の飯田の街と疎開文人を活写した貴重な郷土資料でもある。

多量に転動した昭和36年頃の演劇の写真などもあるから、教壇を去るまで水野が演劇に関わっていたことが窺い知れる。これもまた郷土の演劇史・文化史にとって貴重な資料なので、(2020・1・5)